

がん患者と海外旅行

大阪市の谷口医師「希望や自信に」

闘病打ち明け「免疫力上昇を感じた」

がん患者に生きる希望を持ってもらおうと、大阪市旭区の「たにぐちクリニック」の谷口一則院長(46)が、患者とモンゴルや沖縄を訪れている。参加したがん患者は「旅行の開放感で免疫力が上がっていくのを体で感じた」「苦しんでいるのが自分だけじゃないとわかった」と喜ぶ。谷口院長は「引きこもりがちな患者が、外に出ることで、劇的に表情が明るくなり、体調も良くなる。今後も旅行を企画したい」としている。



モンゴルで乗馬を体験するがん患者(平成17年)

谷口院長は、自らが所属する医療相談機関「e-クリニック」(大阪市淀川区)と旅行を企画。これまでにモンゴル(平成17年)と沖縄・久高島(18年)の計2回の旅行には、乳がん、胃がん、腎臓がん、悪性リンパ腫などの患者24人が参加している。現在、旅行に行った24人のうち20人ほどが生存している。

谷口院長は過去に2回、モンゴルで医療ボランティアに従事。その際、大自然の中でたくましく生きるモンゴル人の姿に感銘した。「治療で閉じこもりがちになるがん患者がモンゴルに来ることで、失いかけた希望や自信を再び持つことができる」と思ったという。

「e-クリニック」に登録している患者などに呼びかけて旅行の参加者を募集。患者のほとんどは最初から、がんという病に侵された体で海外に行くことに乗り気だったという。また、旅行に谷口院長や看護師ら医療関係者7人が付きそうことで安心して参加を決めた。

旅行中、がん患者は顔色が変わるほど元気を取り戻し、普段以上に食欲もあった。モンゴル旅行(4泊5日)では、遊牧民の住居、ゲルの中で参加者ががんの体験を語り合う会を開き、苦しみや悩みを打ち明け合って涙を流す人もあった。

大阪市在住の教員(47)は参加の約1年前に胃がんを発症。手術を行ったが、再発の可能性があり不安でいっぱいだった。「大草原を思い切り走り、体調に自分でもわかる変化があった。他の患者と交流し、闘病生活を打ち明けられることができ、気持ちもすっきりして生きること」に今まで以上に前向きになった」と話す。

谷口院長は「安静にしているだけなら、気持ちでがんに負けてしまう。無理と想っていた旅行に参加することで、新たなパワーがわ

きになった」と話す。谷口院長は「安静にしているだけなら、気持ちでがんに負けてしまう。無理と想っていた旅行に参加することで、新たなパワーがわ

き精神的にがんに打ち勝つことができる。それは肉体的な快方へとつながる。とくに未知の地を訪れる旅行に大きな効果がある」と話している。

(板東和正)